二人の短編集

でんでん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二人の短編集

【Ｎコード】
Ｎ７３０２Ｙ

【作者名】
でんでん

【あらすじ】
コ哀、新志の短編集。

昼休み（前書き）

キターーーー短編集（＞＜＊）ノ~~~~~
とまぁ調子に乗っているＡｓｕです。

昼休み

ある昼休みのコトだった。哀は歩美と喋っていると、隣のクラスのＮｏ．　１にもてる有川優に呼び出された。

優「あの、灰原さん。僕と付き合ってもらえませんか？」

哀「いや。」

哀は失礼ながら、速攻で告白を断った。当たり前だ、自分には江戸川君がいる。小さくなった頃からもう、５年がたった。その間、ずっと想ってきたのだ。

哀「それじゃ。」

そのまま、灰原は去っていった。

あの後、少年探偵団のグループで帰っていた。哀はコナンの横顔をジーーーーっと見つめていた。そして小さくため息ついた。

哀「素直になれたらね。」

この気持ち（前書き）

コナン目線です（＞＜＊）ノ~~~~~

この気持ち

コナン「なぁ、灰原ぁ。」
哀「いや。」
コナン「何もいってねぇし。」
哀「どうせ、昼飯作ってー。とでも言うんでしょ。」
コナン「…正解。」

ある日の昼下がり。灰原はいつもの様に何でも俺の事を見透かしてくる。
しばらく俺が見つめていると、灰原はため息をつきながら立ち上がった。

やっぱり灰原は優しい。いつからだっけ、こんな灰原を好きになったのは。守りたくなったのは。

初めて泣かれた時にあった気持ちがそのまま大きくなって今に至る。
気づいたのは、組織を倒して解毒剤が出来た時だった。

コナン「なぁ、灰原ぁ。」
哀「何？私今忙しいんだけど。」
コナン「…なんでもない。」

この気持ちが伝えられたら。どんなに楽か。
少し勇気を振り絞って、伝えてみっかな。

今度。

彼女の瞳（一）（前書き）

何か前後編になりました（T＾T）
すみません（ノ―・，）

彼女の瞳（一）

組織を倒して解毒剤を飲み、俺は工藤新一に戻った。灰原も宮野志保に戻って、味わったことのない高校生活を楽しんで（？）いる。

解毒剤を飲んだ後に蘭に告白した。俺がコナンだったってことも話した。

その事を宮野に話すと、「よかったわね。」と言ってくれた。しかしその日からだった。宮野がどことなく悲しそうな瞳をし始めたのは。

蘭「ねぇねぇ新一！！！今度トロピカルランド行こうよ♪」

新一「あぁ。」

俺が蘭と話しているとまただ。またアイツが悲しそうな瞳をしている。

そんなアイツを見てると胸が苦しくなる。俺には、蘭がいるのに…どうかしてる。宮野の事が気になるなんて。

新一「なぁ、宮野。」

志保「何よ。」

新一「おめぇ何でそんなに悲しそうな目ぇしてんだ？」

志保「貴方には関係ないわ。」

喋りかけても、ほら。悲しそうな瞳をしている。そんな悲しそうな瞳すんなよ。

あの目をしている宮野を見てると、何か守りたくなる。蘭には抱か

ない感情が沸き上がってくる。

あぁ。何でか分かったかも。俺、宮野の事が好きなんだ。

彼女の瞳（二）（前書き）

続きです／（＜＿＞）／

彼女の瞳（二）

俺が宮野を好きと気づいた日から、二日後、俺は蘭を呼び出した。

蘭「新一…？話って？」

新一「蘭、別れてくれ。」

蘭「！」

新一「他に守りたいやつが出来たんだ。いきなり、悪りぃ。」

蘭「新一…。その人、志保さんでしょ？分かるよ、なんとなく。」

新一「あぁ。」

蘭「仕方ないね…。新一が志保さんを好きなら。」

蘭はやっぱり優しい。俺のこと、ちゃんと分かってくれてる。

蘭「志保さんの所、いかないでいいの？」

新一「ありがとう、蘭。」

それだけ言って、俺は走り出した。宮野のもとへと。

走って走って走って走って走って走って走って走って宮野を見つけた。彼女を見るだけで、胸がきゅんきゅんする。俺はどっかの少女漫画のヒロインか？

新一「宮野！！！」
志保「何よ。うるさいわね。」
新一「俺、宮野の事が好きだ！！！」

言った。すげぇ勇気が必要だったけど。

志保「蘭さんは？」
新一「ふった。」
志保「はぁ？」
新一「俺はおめぇが好きだ。」
志保「私はそうじゃなきゃ困るけどね？」
新一「はぁ？」
志保「あたし、貴方のこと、灰原哀の頃から好きだったもの。」

今…何て言った……？？？？
み、宮野が俺のこと、好きって？？顔が熱い。きっと俺、今顔真っ赤だ。

真っ赤な顔のまま、俺は宮野を抱きしめた。

彼女の瞳（二）（後書き）

何か…ビミョー。
駄文で、すみません（ノ―・，）

サヨナラ（前書き）

何かアカン。っていうか雛花さんのと何か似てます。すみません（ノ―・’）

パクった訳じゃないんです（泣）

サヨナラ

暗い部屋の中で涙を流している青年と静かに笑っている女性がいた。
そして青年の手の中には銃――――――。
矛先は女性のこめかみだった。

――――――――――――――――――――

いつもの様に博士の家でくつろいでいた新一は志保に甘えていた。

新一「志保ぉ。」
志保「そういえば貴方、今日どうするの？嫌って言っても止まって行くんでしょうけど。」
新一「当たり前。」
志保「じゃあ、着替えとって来ておきなさい。」
新一「めんどい…。」
志保「別にいいのよ？私のとびっきり女の子らしい服を貴方に着させても。」
新一「いってまいります。」

新一は即座に立ち上がって着替えを取りに行った。

新一が自分の部屋に来ると、人の気配を感じて後ろを振り返る。
そこには蘭がいた。

新一「おぅ。蘭どうした？」
実は新一は先日蘭を振ったばかりでそれ以来喋っていなかった。
蘭「新一に復讐しにきたの。と言っても新一を殺す訳じゃないよ？新一の最愛の人を殺しに行くの。」
蘭は淡々と話していった。これが幼なじみだった蘭…？新一には信じられなかった。
新一「蘭…？」
蘭「でもそれじゃあつまんないよね？だから新一、志保さんを殺してきて。」
新一「無理だ。」
蘭「可哀想に。子どもたちと博士の命を無駄にするんだ？」
新一「…！」
蘭「はい、拳銃。子どもたちと博士、守ってあげなよ…？」
そのまま蘭は出ていった。俺は脱力していた。志保を殺せだと？無理だ。しかし子どもたちと博士も見過ごせない。やっぱり志保を殺さなければならないのか。
新一は重い足取りで博士の家に戻った。
志保「遅かったじゃない。何かあったの？」
新一「子どもたちと博士が人質にされた。」
志保「え…。」
新一「要求に答えないとならなくなった。」
志保「要求は？」
新一「俺が……志保を殺さなければならない。」

志保は一瞬驚きの色を見せたが、すぐに静かに笑った。

志保「それなら早く殺しなさい。」

その言葉で新一は泣きながら銃口を志保のこめかみに当てた。そして――――――

バァン

銃声が部屋の中に響き渡った。その音と同時に志保は崩れ落ちた。

志保「サヨ…ナラ……。」

志保はその言葉を発した後、帰らぬ人となった。

新一「志保ぉぉぉぉぉぉ！！！」

その後、新一はずっと泣いていた。人質が解放されたと知っても、
蘭が捕まったと知っても。新一はずっと泣いていた。

サヨナラ（後書き）

新一…可哀想。

愛しい君へ（前書き）

コナンから哀ちゃんへラブレターです（笑）
コナン君、ヘタレーーーー！

愛しい君へ

灰原へ。

おめぇ、俺の気持ち知らねぇだろ？
って言っても俺も最近まで気づかなかったんだけどさ。

俺、前まで蘭が好きだと思いこんでた。でも違ったんだ。
俺は、灰原が好きだ。

俺、おめぇのこと、守ってやっから。
だから、逃げんじゃねぇぞ。

コナン「俺はバカか。」

コナンは書いてて馬鹿馬鹿しくなった。
最近、灰原がやたらキレイになってきて、置いていかれそうだ。それで、我慢が出来なくなってきて、告白という結論になったんだ。

やっぱり手紙より、直接言うか。

愛しい君へ（後書き）

うーーーーーわーーーーーー短いっ（＊__＊）

ｋｉｓｓ（前書き）

授業中に適当に書いたやつです。
ちょっと見苦しいかも…。

kiss

コナン「灰原…。」
哀「ごめんなさい。本当に…ごめんなさい…。」
彼女は泣いて謝ってくる。何度も何度も。別に、謝らなくていいのに。解毒剤なんて必要ないんだ。灰原の隣にさえいられれば。
今日、灰原に呼び出され、解毒剤が出来ない体質になってしまったと告げられた。もちろん俺は少しショックを受けた。けど、少しだ。
コナン「いいよ、灰原。」
哀「ホントに…ごめんなさい…。」
コナン「なぁ、俺、別に元に戻らなくてもいいんだよ。」
哀「えっ？」
灰原は涙で濡らした顔をあげた。その顔はとてもキレイだった。
コナン「俺は元に戻れないより、灰原が隣にいねぇ方が辛ぇかな。」
哀「それってどういう…」
コナン「こういうことだよ。」
俺は彼女の唇に自分の唇を重ねた。灰原の顔はみるみる赤くなっていく。
コナン「俺はおめぇが好きだ。」
哀「う……そ。」

コナン「本当だよ。」
哀「うそっ！そんなの気の迷いよ。だいたい、蘭さんはどうしたのよ？」

やっぱり、そう思うか。

コナン「俺は、蘭のこと好きだった。もう過去形だよ。」
哀「あんなに元に戻りたがってたのに…。―――私が、私の存在が、貴方達二人を引き離してしまったのね…。」

悲しそうな瞳をする灰原。なんで…。何でそうネガティブに考えるんだよ。俺は…もう灰原しか考えられねぇのに。

コナン「バーロー。おめぇのせいじゃねぇよ。」
哀「貴方はどこまでも優しいのね…。でも私、貴方のそういうところ、嫌いじゃ無いわよ？」
コナン「逆に好きだろ。」
哀「貴方は自惚れ屋なの？でも、そうかもね？私、貴方のこと、大好きだから。」

は…？

コナン「マジで…？」
哀「二回も言わないわよ。」

嬉しすぎて、俺は灰原を抱きしめた。

哀「えっ、ちょっと！！！」

声は抵抗しているが、満更でも無さそうだ。その後、どちらともな

く、二回目のキスをした。

kiss（後書き）

誤字の指摘、お願いいたします／（＜＿＞）／

切なさ（前書き）

哀ちゃんの思いです。

切なさ

お願いだから優しくしないで。

貴方の優しさが犯罪者の私には辛すぎるのよ。

どうして私を助けてくれるの？私なんかほっとけばいいのに。貴方が大切なのは蘭さんでしょう？

バカじゃないの？

どうせなら罵倒してよ。ひどいくらいに。

その方が私としてはよっぽど気が楽なのよ。

貴方の優しさは只の空回りなのよ。無駄なことなのよ。それがわからないの？

それなのに…どうして？どうして私なんかに優しくするのよ。

貴方の優しいから私は江戸川君を好きになっちゃうのよ。

お願いだから…お願いだから優しくしないで。

切なさ（後書き）

遅くなってすみませんでした（ノ―・，）
誕生日でテンションあがってて（。ロ。）

やきもち

「志保ぉ…ひ「私は暇じゃないんだけど。」
「腹へっ「お腹空いたなら蘭さんの所に行きなさい。」
「志保が作っ「言っとくけど、私は作らないわよ。」
「…」

只今、志保はすごく機嫌が悪い。何でだっけ？なんか悪りぃことしたか、俺…。

「何でそんなに機嫌悪いんだ？おめぇ…。」
「自分で推理すれば？彼女より事件が大好きな名探偵さん？」

志保の言葉はどこか刺々しい。そりゃそうか…。デートほったらかしにして事件ばっかり行ってたもんな…。

――――ん？

俺は口角を上げて志保に聞いてみた。

「もしかしておめぇ、事件にやきもちやいてんのか？」
「なっ…！ち、違うわよ！！！」

真っ赤になって反論する志保…図星だな。俺はニヤリと笑って志保を抱きしめた。

「おめぇ、かわいいな！」

「はぁ？」

そのまま強く、志保を抱きしめ続けた。

puzzle

「はぁーー。」

と、ため息を1つ。志保はやっぱり今夜もまた部屋を出てしまった。ケータイのワンセグだって何も笑えない。只つまらないことをしてるだけ。

窓から見える工藤君と蘭さんのキスシーン。

誰のせいでもない。別に優しかったあの人なんて、もういなくても平気。みたいな顔ですましてるけど、そんなわけない。あの二人のツーショットから目をそらしただけ。

街の中を歩いていくと、人とぶつかった。志保の荷物はすべて飛び出す。慌てて荷物を拾うとケータイの待ち受けには笑顔の二人がいる。

そのまま操作をするとお互いの名前が入ったメアド。

二人の中を繋ぐのはこれだけ。だから、忘れようと削除の操作をすると手が止まる。どうしても消せない。

哀の頃は、いつも肩肘をはって、強がって生きてた。

弱い自分をみられないように。彼への想いを心に並べても未完成なパズルのようで。どこか足りない。

当たり前のようにずっと傍にいた。志保としてはそれで十分。それだけでよかった。

思い出すだけで涙が出てくる。
きっと蘭さんはすべてのピースが揃ってる。
私には…足りない。私に足りないピースのたった1つを見つけたい。

そうパズルね。

puzzle（後書き）

倉木麻衣さんのpuzzleです＼（＜＿＞）／

キョリ―哀バージョン―

わからないでしょうね。工藤君には。
私が貴方を愛してるっていう事実を。
気づいてないでしょう？私がずっと貴方をみてること。
気づいてないでしょう？ずっと貴方の隣で笑っていたいっていう想い。
この気持ちが伝えられたら…どんなにいいか。
でも許されないことなのよ。
犯罪者に幸せなんて―――あってはならない。

それに、貴方には蘭さんがいるでしょう？
だから…私はこの想いを封印するの。ううん、しなきゃならないのよ…。
だからきっと、このキョリがちょうどいいのよ。
もう、これ以上なんて望まない。蘭さんと工藤君のために。

それに、私はこのキョリでいたいから。そのままずっと……

キョリ―哀バージョン―（後書き）

誤字の指摘、お願いいたします／（＜＿＞）／

キョリ―コナンバージョン―（前書き）

コナンバージョンです＼（＜＿＞）／

キョリ―コナンバージョン―

わからねぇだろ？灰原には。
俺がおめぇを愛してるっていう真実を。
気づいてねぇだろ？俺がおめぇをずっとみてること。
気づいてねぇだろ？おめぇの隣で笑っていたいっていう想い。

この気持ちが伝えられたら…。どんなにいいんだろうな？でも、ダメだ。
俺がこの気持ちを伝えたら灰原はきっと苦しむ。そんなのみていられねぇ。
だからきっと、このキョリがちょうどいいんだよ。
辛いけど、もう、これ以上は望まない。灰原のために。
それに、俺はこのキョリでいたいから。

寝言

「志保ぉ？ただいまっと。」

新一は何の躊躇もなく阿笠邸にあがりこんだ。リビングを覗くと、目当ての人はいた。

すぅすぅと規則正しい寝息をたててていた。

すっげえキレイな顔。ヤバい、かわいい…。

新一は見惚れていた。

白い肌に長いまつげ。整った顔立ち。

「ん、」

起きるのかと思い、新一は後ずさった。志保は寝起きがかなり悪い。

しかし、その心配はなかった。

「工藤君…。」

「えっ？俺？」

「愛してる…」

新一は一瞬驚いたが、すぐに笑顔になった。

「俺もだよ。」

小さく呟き、眠ってる志保のおでこにキスをした。

そのタイミングで志保が起き、薬の実験台にされたらしい…。

隣の彼

隣の彼はいつも寝てる。何でかこっちを向きながら。

今は六時間目、数学。いつもは寝ている彼のことなんかほとんど無視。でもなんか今は…彼を見つめてしまう。

白い肌、長いまつげ。すごく整った顔立ちをしている。少しはねている髪も、なんだかかわいい。

あっという間に放課後になった。彼はまだ寝ている。教室は私と彼の二人だけになった。

「起きなさい、工藤君。放課後よ。」

揺さぶっても起きやしない。…ちょっと位、はめをはずしてもいいんじゃない？

少しずつ、彼の顔に顔を近づけていく。その瞬間、工藤君と目があった。

「ん、宮野？」

「！」

少し後ずさった。そして冷静になるように努めた。彼はそんな私に気づかず、ニヤリと笑った。

「おめぇ、今俺にキスしようとしただろ？」

はめなんかはずさなければよかった。顔が熱い。いつものポーカーフェイスはどこへやら。

「ま、いいや。これで遠慮しなくていい。――――俺も好きだよ。」

彼があまりにも真剣な目で見つめるから。少しずつ鼓動が高鳴っていく。

私が固まっていると彼に抱き締められた。もう、全身が熱い。でも、もう少しだけ、彼に身をゆだねてもいいかもね。

そのまま二人は抱き締めあっていた。

あの蒼い月光（前書き）

お久しぶりです＼（＜＿＞）／
月夜の悪戯の魔法をもとにした小説です。
新→快志です。

あの蒼い月光

暗い暗い部屋の中、新一はふと、空を見上げた。思い出すのは、今日と同じ蒼い月光だったあの日。

――――――――――――――――――――――――

組織を潰して俺は工藤新一に、灰原は宮野志保にそれぞれ戻った。その時にはもう、俺は宮野に恋をしていた。ずっと守りたいと思った。

その後、俺は学校に復帰して、宮野は転校してきた。はじめての高校はそれなりに楽しいみたいだ。

蘭はふった。復帰してからすぐに。宮野が好きだとも言った。すべてを話した。

蘭は笑って俺の恋を応援してくれた。やっぱり、蘭は優しい。

最高の幼なじみだと思った。

その直後、綺麗な月が出ている日に俺は宮野に告白した。

「ごめんなさい。灰原哀の頃は、ずっと好きだったわ。でも、今は他に好きな人がいるの。とっても優しくて、温かい、頼れる人が。」

この返事は俺の胸をズタズタにした。コナンの頃からずっとあった思いだったのに。伝えていれば、何かが変わった？

「もしかして…黒羽？」

「そう。来週には、二人で暮らすつもりよ。だから今日が最後になるかもね。――――サヨナラ、工藤君。」

手をふった後ろ姿。あまりにも綺麗で。俺は動けなかった。

なによりも黒羽が羨ましかった。あの日、宮野を連れ去ったのだから。

――――――

その日から、宮野と会うことはなかった。もうかれこれ3ヶ月。

毎晩、宮野の夢を見る。もう一回あって、心から心から伝えたい。愛してる愛してる届かぬ思い。絶対に伝えられない。伝わらない。

夢ならば夢ならば、宮野に会えるのに。想いを伝えられないけど。会いたいという祈りは届かない。

宮野はいつも影に囚われていた。その闇を救ったのは黒羽だったんだ。それが俺だったなら。よかったのにな。

新月が闇に潜むように宮野の姿が見えない。

あんなにも近くにいたのに。

頭の中を占めるのは

どうしてだろう。最近灰原が気になる。
中学一年生になった俺らは、今日が入学式。横にセーラー服姿の灰原。

……可愛い過ぎだろ。

前まではなんともなかったのに。
ただの目付きが悪い欠伸娘としか思ってなかった。

でも、いつからだっけ？
灰原を守りたいと思ったのは。灰原の存在がこんなに大きくなっていたのは。灰原がいないと、こんなにも胸が空っぽになるのは。灰原に告白する男子にどうしようもなく嫉妬してしまうのは。

俺って灰原が好きなのか？

頭の中を占めるのは（後書き）

自分の気持ちに気づいたコナン君。

素直になれない

中学校からの帰り道。
哀は河川じきをぶらぶらと歩いていた。いつも一緒に帰っている人
――――コナンは今日は部活だ。
ボーッとしていると後ろから声をかけられた。
「あら。哀ちゃん。」
「蘭さん…。お久しぶりね。」
毛利蘭。去年、新出さん結婚した。相変わらず、キレイな人だった。
「コナン君と上手く行ってる？」
「私は江戸川君なんか好きじゃありません。」
「素直になりなよ、哀ちゃん。って、用事で急いでたの忘れてた！じゃあね。」
嵐のように去っていった。
――――素直になんかなれないわよ。
どうせ私はひねくれものだから？

――――でも、ちょっとからかい半分でならいいかもね。
やっぱり私は素直になれない。

素直になれない（後書き）

イミフデス。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7302y/

二人の短編集

2011年12月29日10時56分発行